

湯澤規子 著

『在来産業と家族の地域史—ライフヒストリーからみた小規模家族経営と結城紬生産』

古今書院 2009年1月 238頁 5,400円+税

本書でのいう「在来産業」は、地場産業や在来工業などさまざまな用語で規定されてきた。これらは地域的な集積と歴史性を有する産業であり、地域の固有性を示すものみなされ、地理学のみならず、歴史学・社会学・経済学・経営学などの隣接諸分野で研究されてきた。地理学においては、織物工業に関する膨大な研究蓄積があり、地域内部における社会的分業に基づいた生産構造の解明や、出機圏の研究などがなされた。また、高度経済成長期以降の産地の再編成とそのメカニズムの解明も、織物工業で追究されてきたテーマである。

関東地方には桐生・足利をはじめとして数多くの織物産地が分布し、関東機業地域とも呼ばれたが、それらの産地の多くは1970年代以降急速に衰退し、もはや産地としての規模を維持できなくなつたものも多い。地理学におけるこの分野の研究は、一般に経済地理学のなかに位置づけられてきた。その説明様式は経済の論理に基づき、往々にして景気の変動や需要構造の変化といった、より広い空間スケールでの経済現象が産地の変容を規定すると理解してきた。また経済地理学的な観点では、産業そのものが経済的な存在であり、生産が減少したり、産地の体をなさなくなるまで縮小した産業に対する関心は必然的に低くなる。織物工業をはじめとする地場産業・在来工業研究も、1970年代以降急速に退潮した。

いわばじり貧状態の地場産業・在来工業研究の中で、著者の一連の研究は異彩を放つ。著者のキーワードは一貫して「家族」「暮らし」であり、「生産」「経営」を軸として展開してきた従来の研究とは一線を画する。本書は家族・暮らしを見つめた著者の研究をまとめたものである。

本書が対象とする結城紬の機屋の多くは農業をはじめとするさまざまな生業を組み合わせて生計を維持してきた。紬はその多様な経営部門の1つであった。また、紬生産は家事や育児などの暮らしの営みとも不可分の関係にあった。サラリーマンの労働形態が一般的な現在では、労働の空間と

暮らしの空間は分離され、われわれの多くは2つの空間の間を行きつ戻りつしながら生活している。しかし結城紬を織る行為は、日々の暮らしと時空間的に切れ目なく連続している。筆者は労働と生活がつながり合う結城紬の特性を本書の根幹に据えている。

本書の構成は以下の通りである。

- 第Ⅰ章 序論
- 第Ⅱ章 結城紬生産地域の歴史的展開
- 第Ⅲ章 結城紬生産地域の構造と地域的特徴
- 第Ⅳ章 小規模家族経営の構造と論理—紬生産維持のメカニズムとしての家族内分業—
- 第Ⅴ章 暮らしの変化と紬生産地域への影響—高度経済成長期と紬生産—
- 第Ⅵ章 結論

第Ⅰ章では著者の観点が明示される。筆者は分析概念として「家族」「技能」「暮らし」を提示している。家族とは複数の人間によって営まれる協働行為を調整するシステムである。この概念規定が家族構成員間でなされる労働の分担、すなわち家族内分業によってさまざまな生業が維持されてきたことを語り起こす起点となっている。技能は単に紬の生産技術を指すのみならず、作り手の人間性や属人的な個性を含んだより広域的な概念としてとらえられる。そして暮らしは、経営と家計が入り混じった総体である。これらの概念はそれぞれ独立するものではなく、相互に密接な関係を有していると考えられる。すなわち織り手として高い技能を有する女性は、同時に妻であり母であり嫁である。そのなかで技能者としての立場だけを取り出すことは不可能であり、妻・母・嫁としての役割との関係の中で理解されなければならない、というのが筆者の立場であろう。このような観点は、人間の営みのなかから生産のみをとり出して分析してきた、従来の経済地理学的視点に対する批判を含む。

この章では筆者の主要な研究手法であるライフヒストリーについても議論される。ライフヒストリーの採集は、一般に言われる聞き取り調査よりもさらに踏み込んだ、質的な内容を含む。ライフヒストリーは個人的な口述史と一般的には理解されている。個人的であるからこそ、その内容にはリアリティや迫力があり、読者は感情移入や共感が容易である。しかしその一方で、個人の経験や

語りの枠内にとどまる限り、ライフヒストリーを地域や社会といったより広い枠組みに位置づけることは困難であり、とくに地域を扱う地理学の研究手法としての妥当に疑問が呈される。しかし、紬生産を暮らしのなかに位置づけるには、ライフヒストリーは有用な方法であると筆者は主張する。さらに話者が保管していた諸記録や紬の残片を加えることで客觀性を担保し、ライフヒストリーを家族・地域・歴史と関連づけることで、個人の枠にとどまらない広がりをもたせようとしている。

第Ⅱ章および第Ⅲ章は、結城紬産地の基本的性格を理解するために設けられた章である。在来工業や地場産業の研究では、地域の概観とともに産業の概観が必要である。例えば具体的な製造工程をふまえなければ、産業内部の社会的分業を理解することはできない。製造工程の説明には「管巻き」だの「かせあげ」だの、聞き慣れない用語が飛び交い、読者の理解を妨げる。現実問題として、この部分の記述が煩雑で分析の本体になかなかたどり着けないことが当該分野の研究者たちの悩みであろう。本書は第Ⅱ章で結城紬産地の発展過程をたどり、第Ⅲ章で産地内部の生産構造を提示している。この部分をなるべくコンパクトにおさえようとする筆者の努力は見て取れるが、それでもこの2章分で約70ページ、全体の3分の1近くを費やしている。

それでも第Ⅱ章の結城紬産地の発展史からは、高度経済成長期において紬生産を組み込んだ複合的な生産構造が崩壊し、専業機屋と賃機からなる生産システムが形成されたことが明らかにされる。また第Ⅲ章の生産構造分析からは、①結城紬産地の分業構造には地域内分業と家族内分業の2つの位相が存在すること、②従来から議論された絆柄の地域分化には、家族労働力の構成が関与していること、③産地問屋である縞屋の分析から、紬生産には農作業に規定された季節性があること、④そして鬼怒川沿岸地域の農業生産性がむしろ高い水準にあり、農業に水運をはじめとする商業、さらには紬を組み合わせた複合的で多様な生産構成が見られたこと、が導かれた。

第Ⅳ章では結城市大字中<sup>なか</sup>の一地区をとりあげ、3人の織り手のライフヒストリーを分析することで、家族内分業の構造を提示し、それを支える論

理を提示する。ここでは単に聞き書きを連ねるにとどまらず、織り手が保管していた紬残片を糸口として当時の心情を語らせたり、「機織帳」「糊付帳」などの個人的記録から紬生産の経過を再現するなど、さまざまな手法で紬生産の実態を描き出そうと試みている。

そこから理解されることは、紬を織ることが無機的な「生産」行為であるだけでなく、織り手の人生や家族の事情と深く関連し合っていることである。織り手の女性は、本人の加齢、出産や育児といった身体的变化に加え、子どもの成長、夫の転職、老親の世話などによって、紬生産への取り組み方を変えざるを得ない。すなわち紬生産は家事や育児といった仕事との兼ね合いのなかでその位置づけが決まった。しかし、これらの諸事情のうちどれを優先するかについての原理のようなものはなく、労働の重点は家族内外の状況に合わせて流動的に変化する。

家族内分業は家族構成の推移に合わせて変動する。すなわち、若いときには体力に任せて機を織っていた女性も、加齢とともに機を嫁や娘に譲り、自らは下揃えや糸取りにつくようになる。また、代替可能な労働は家族間で臨機応変に分業される。例えば、子どもを生むことは女性にしかできないが、ミルクを与えることは男性にもできる。結城では女性を機に専念させるために、その夫や舅が買い物に行ったり食事の準備をすることが珍しくなかったという。家族内分業はこのような柔軟性をもつ。家族内分業は外部環境の変化に對して柔軟に対応することができる、複合的な生業を維持しうる強靭性を有していた。

また家族内分業は紬生産そのものの内部にも顕在化した。夫や舅が紬糸を括り、姑が糸を機に並べ、嫁がそれを織る、といった工程間分業が家族内でなされた。このことはとりもなおさず、家族構成員が分業によって一生を通じて紬生産に関与し続けられることを意味した。

家族内分業の目的は、生産を効率化することでも利益を最大化することでもない。暮らしを維持することそのものが家族内分業を貫く論理である。いわば「暮らしの論理」とも言うべきものが結城紬産地にはあり、これこそが、結城紬を成立・存続させた条件であると筆者は指摘している。

第Ⅴ章では、結城紬が衰退局面を迎えた1980年

を画期として、産地の変容の背後にある家族および生産のメカニズムの変容を分析する。この章では第Ⅲ章・第Ⅳ章で既出の家族3代のライフヒストリーを連結し、従来の「暮らしの論理」が通用しなくなってきた過程を描き出している。

結城紬は、生産反数で見る限り1980年頃まで年3万反の水準を維持してきた。しかしそれは賃機の析出により生産が効率化した結果もたらされた、見かけ上の維持にすぎなかつた。分析対象となった機屋の女性らのライフヒストリーからは、高度経済成長期における複合的な生業システムの崩壊が、家族内分業を基盤とする結城紬の生産構造を変化させたことが明らかにされた。鬼怒川沿岸地域では、養蚕をはじめとする農業に紬生産や諸稼ぎを加えた複合経営で暮らしを維持されてきた。しかし、高度経済成長期の需要増加に対応するためには、家族内の労働力資源を紬に傾注する必要があった。その結果、機屋の一部は紬に専業化した。その一方で、夫がサラリーマンとして他地域に通勤する勤務形態が一般化し、絹括り技能を欠いた機屋は賃機に移行せざるを得なかつた。

専業機屋と賃機の二極化は見かけ上の生産維持に寄与したが、結城紬が基盤としてきた柔軟で強靭な家族内分業という基盤は失われた。その結果、かつては存在した織り手と括り手の密接な協働関係が崩壊し、高級品生産を継続することすらが困難になつた。結城紬の生産減少は需要構造の変化に加えて、産地内部、家族内部の分業関係の変化が重層することによってもたらされたと著者は結論づけている。

この章においてもライフヒストリーは重要な分析素材を提供している。冒頭の3代にわたる女性のライフヒストリーからは、高度経済成長期に嫁いだ女性だけが紬経営の大きな変化を経験したことが浮き彫りになつた。また、賃機化のプロセスを記載するために多くの女性のライフヒストリーが紹介され、彼女らの生産の実態がいきいきと活写されている。

第VI章ではこれまでの分析が総括され、地域や産業に対する家族の意味が考察される。結城紬産地においては、家族内分業と複合経営によって特徴づけられる小規模家族経営が、結城紬を成立・維持するための重要な基盤であった。さらに産地や地域の変化は、それぞれの家族内部の事情が積

み重ねられた結果として表れるものであるとの見方が提示された。

本書の最大の特徴はライフヒストリーを分析の中心に据えたことであろう。記述の随所に見られる語りのありようは、有吉佐和子の小説『鬼怒川』を彷彿とさせる。紬をとりまく人びとの思いや心のありよう、視点を置くことが、かくも説得力をもつことを本書は示している。地理学においてもライフヒストリーを使った分析の有効性を証明したことが、本書の第1の功績であろう。

評者も奄美大島の大島紬を調査した際、織り子の女性から「紬のおかげで子どもを大学に行かせることができた」といった話を幾度か耳にしたことがある。しかし、これは彼女の個人的な経験であり、どれだけ代表性があるか疑わしいと思い、まさに「お話」として聞き流していた。一方、筆者は本当に何気ない口述にも耳をそばだて、そこから考察を展開している。例えば織り手になる動機として「人並みの仕事がしたいと思った」(191ページ)といったごく平凡な発話を得て、紬を織ることが何も特別なことではなく、むしろ一人前の嫁として認められるための条件であることを、そこから導き出している。おそらくこの発話は、織り手の女性の口から淡々と出たものであろう。凡庸な研究者が通り過ぎてしまうところに、筆者は立ち止まりじっくりと耳を傾けた。その謙虚な研究姿勢に胸うたれる思いがする。

本書のもう一つの特徴は、地域の変化をもたらす要因として、機業の経営内部の動向に目を向けていることであろう。従来の経済地理学的観点では、よりマクロな環境変化をより大きな変化要因として取り上げてきた。経営内部の諸条件は、まあ無視はしないもののさほど大きな説明率を持つものとはみなされてこなかつた。加えて筆者の言う機業経営は、家計や家族と不可分の関係にあり、むしろ家族や家計の延長線上に機屋としての経営や生産がある。この視点自体、従来の経済地理学が持ち得なかつたものである。

生産構造の変化に関して、本書では専業機屋と賃機の二極化を指摘している。従来の経済地理学的視点に依拠する限り、生産反数が維持された状態での構造変化は、一種の「進歩」として肯定的にとらえられたであろう。そして1980年以降の衰退要因は構造変化とは別のところに求められたで

あろう。しかし、家族経営自体が産業の基盤であるとする本書の立場からは、家族の枠組が変質した高度経済成長期に、すでに産地の衰退の予兆があつたことが見通せる。本書の視点は、表層的な数字の変動を透視し、産地の本質的变化をえぐり出している。

しかしあつ一度ライフヒストリーについて立ち戻って考えると、きわめて個人的な事情、あるいは家族内部の事情の積み重ねが、産地や地域に大きな変化をもたらすことは理解できるものの、筆者のこういった主張が果たしてどこまで論理的説得性をもちうるであろうか？筆者の所説は、個人的な事情をいくら書き連ねたところで論理的に証明することは困難であろう。であればこそ、ライフヒストリーを使った説明様式に説得力をもたせなければならない。いわば情緒に訴えかける部分が本書にはなきにしもあらずと見受けられる。そういう意味では、論理的説得を放棄し、語りに依存したライフヒストリーの提示に違和感を感じる

読者もいることであろう。実証とは何かといった深遠なテーマを論ずる余裕も能力も評者にはないが、これも実証の一手法であるとひとまずは認めたい。

筆者は残された課題として、家族制度・家制度の変遷について十分な議論ができなかつたことをあげているが、家族のありようが地域や産業の存立を規定するという観点に立つのであれば、この点は解決されなければならない課題であろう。また、他産地や諸外国との比較研究も、当然なされなければならない。

総括して、個人や家族に視点を置いた本書の立ち位置は、既往の在来工業・地場産業にない斬新さを有している。また、ライフヒストリーを用いた分析が有効であることが示された。ライフヒストリーの手法は、在来産業のみならず他のさまざまな分野においても適用が可能であろう。今後の研究の進展が期待される。

（須山 聰）